

## 手塚治虫作品集その21 — 『火の鳥』

はじめに



『火の鳥』は、どこから読み始めたら一番良いのだろうか？とつくづく思うことがある。この作品は、どこから読んでも読み手に時空間の世界を超えて「火の鳥」と遭遇する人々に出会うことができるからだ。以前、黎明編を扱って講義した事柄を再度引つ張り出してみた。

## 『火の鳥』黎明編〔角川マンガ文庫所収〕

時は古代。女王ヒミコのヤマトイ国と対立するクマン。部族間抗争は烈しく、

戦場は血の海に。度々の危機をくぐり抜けて

数奇な運命をたどる姉弟ヒナクとナギ、防人の猿田彦。

そして、手柄欲しさに「火の鳥」を狙う欲望の男たち。

酷くも美しいヤマトの自然を背景に

「永遠の生命」へのそれぞれの「戦い」を描く。

## 火の鳥の知識伝達とその方法

その1 目前に回想するウラジのことば

○「火の山の怒りくるつた日にならず火の鳥があらわれるといったシビキのおババのことばはほんとうだったぜ」〔8頁1コマ〕…本当。

○「あいつの生き血をしぼつてのめばあの鳥が火の山といっしよにずっと生きてきたように——のんだものはぜったいに死なないからだになるという…永遠のいのちを手にいられると……おババがいった！」〔8頁3コマ〕…一緒。絶対

○「だめだ！あいつは死なないんだじんじょうの弓矢や槍ではやつからだはびくともしないんだ！」〔9頁8コマ〕…尋常。

その2 女王ヒミコに語って聞かせるササノオの伝聞回想のことば

○というの……火の鳥は弓で射ようと槍で突こうと絶対に死なないのだ。あの鳥はもう何百何千年生きていくかわからぬ。クマンの村の囚人の話によれば、その男のじめの子どもの頃こそそのさらに前のじめから火の鳥のうわさを聞いたとかいうことだ。そのうえ、火の鳥はかしく、人間以上の知恵があるそうだ。舞いも踊れば人語もわかるし、われわれがろくに使ったこともない文字というものも、ちやんと知っているという話です。そして火の鳥は、ある時期がくると、われとわが身を、火の壺の中へ飛びこんで焼き、その中から、新しい体が生まれ変わるとい……〔64頁〜65頁〕

その3 猿田彦がナギ伝えることば

○おまえも知つてのとおり、火の鳥はもう何千年も生きていくという、ときどき火の中へ飛びこんではわれとわが身を焼き、新しい若鳥となつて生まれ変わるとい……話だ。その生き血を飲めば永遠の命を得られるそうだ……おれがヒミコさまの命令で、おまえの村を滅ぼしたのも……この村を前進基地にして、大がかりな火の鳥狩りを計画しておいでだったのだ〔132頁4コマ〜133頁2コマ〕

その4 ニニギノミコトが火の鳥を目前に回想

○「あれは……伝説にきいた火の鳥だっ」そういえばおれが子どものころ乳母から聞いたことがある  
東海の倭の国に黄金に輝く仙鳥がいてその血を飲むものは永遠の生命を得るとか……その鳥はわれ  
とわが身を炎に焼き 若鳥に生まれかわるのだそうだ ああ鳥こそ……まさしくそいつだ〔\*18頁6  
コマ・7コマ〕

### かながき漢語表現について

※上記にも示しておく。

○ナギ「にさんの弓はこのかいわいきつてのうでまえなんだクマだつて一矢なんだぜえつ」〔13頁7コマ〕…界限。

○「かんたんにしとめられるものなら 今までにだれかがしとめておるわい」〔13頁7コマ〕…簡単。↓○天の弓彦  
「火の鳥にもあんがい簡単にお目にかかれそうだ」〔\*168頁7コマ〕

○「やめいつナギこは病人のへやじゃぞ」〔14頁1コマ〕…部屋。

○ナギ「ほーらみろつにいさんがもどつたんだ！火の鳥を射とめたんださまあみるモウロクジジイ」〔14頁4コマ〕…  
毫碌。

○「ウラジとヒナクをいつしよにていねいに海ほうむつてやるべえなんしろあんないい夫婦はなつかたげのう」〔16  
頁6コマ〕…一緒。丁寧。案内。

○「長たいへんだ」「なんだつぞうぞうしいまた何かあつたのか？」〔17頁1コマ〕…大変。騒々しい。

○「じようだんじゃないそんなことをしたらよけい死ぬのを早めるばつかりだ」〔20頁2コマ〕…冗談。余計。

●「おだまり！できのわるいじようだんはおよし！」〔\*174頁2コマ〕

○ナギ「ほらつ おべんとうを持つてきてやったよ」〔24頁8コマ〕…お弁当。

○「お 今夜は シラヌ火が ずいぶん出て いるようだね」〔30頁3コマ〕…随分。

○「今夜ほど みごとな シラヌ火は はじめてだ」「えんぎでもねえが……」〔30頁4コマ〕…縁起。

○「ふーん……」「ところで 結婚披露の ごちそうが待つてるぜ さそいに来たんだ」〔30頁8コマ〕

…御馳走。

○ナギ「グズリのようすがへんだぞ」〔31頁2コマ〕…容子。変。

○ナギ「見たこともないかつこうのいくさ人だ シラヌ火のばけものどもだろうか？」〔35頁4コマ〕  
…恰好。

○ナギ「ちくしよっ くそーっ んねんっ うむーっ」〔46頁8コマ〕…生。

○「 …… あいつはよくやったな 間 というものを おれはけい つしておつたが よくい

た 見なおしたぞ」〔47頁12コマ〕…。

○スサノオ「よし ごころだった さがつてやすめ」〔60頁1コマ〕…。

○「ただいま ごとうの 中で」ります お待ちを……」〔60頁2コマ〕…。 ○ヒコ「な  
ぜ祈禱をやめる」〔\*220頁3コマ〕

○ヒコ「あの らのヒ を見たら むちやくちやに はらが つてきたっ ……」〔61頁2コマ〕…。

○ヒコ「わらわに ごたえしたなっ ゆるさぬぞ たかが 人のぶん いで!!」〔94頁4コマ〕…分。

○ヒコ「えーい ぶきげんじゃ」〔9頁10コマ〕…。

○猿田彦「のめ おまえは もう りつ な狩り 狩だ」〔95頁10コマ〕…。

○スサノオ「もう がまんならんっ 上つす 猿田彦を出すように命じてください」〔110頁7コマ〕…。

○猿田彦「ナギ おまえはどうするつもりだ こに むわけにはいかんぞ ヒシコさまの 手がもうす  
まへへ上 してくるだろう ヒシコさまは 走に ようしやはなさらなからな……」〔131頁7コ

マ」…容。  
 ○弓彦「弓彦一生のふかくでさ ……」[\*175頁5コマ] ……  
 ○弓彦「どうもおかしなげはいがしやがる ……火の が一あばれだしそうなげはいだ ……狩りは中し  
 たほうがいいぜ」[\*175頁7コマ] ……。  
 ○「うらがりものっ!!」「むほん人だれだつて さぬ」[\*226頁3コマ] ……。

### かながき和語表現について

○「新しい」火のつぼがつ」[\*186頁3コマ] ↑ ○「新しい」進軍のタイコを鳴らせ! 全軍火の壺へ進め! 霊術をもってみ  
 のほうへ 飛んでいくぞっ」[\*144頁3コマ] ○「新しい」進軍のタイコを鳴らせ! 全軍火の壺へ進め! 霊術をもってみ  
 んなを守つてあげるよ!」[\*176頁3コマ]

### ストーリーリー解説文章

○ギリシア神話では 火山の神を **バルカン**という ひとたび怒ればその声は 大気を逆巻かせ 海をふるわ  
 せ やけたたれた 汚物は あたり一面にあつい層をつくり 生きものも生きぬものもすべてうめつくされる  
 のだ **バルカンの**どういいう気まぐれか …… その煉 **の**なかに …… たくましくはばたく一つの生命があつた  
 それは **死鳥**とも**火の鳥**ともよばれていた[\*7頁 8頁]

○「あをカビ」 「」  
 みなさんはもう「知かも知れないが 中には ニシリ という がふくまれて  
 いる ニシリ は伝 や んだりするきず によくきく ヒナクの は れ で ったきず

あとからばいきんばい が はいつたらしいが たぶん という ろしい だろう  
 にも ニシリ はよくきくのた ただ ふつうは 射すればよいのだが この時 は そんなも  
 のはないから からのませるほかはなかつた こうすると 射の らいの分 があるのだが ぜ  
 んぜん きかないということはない 「21頁」

みなさんはもう「ご存知かも知れないが 青カビの中には ペニシ  
 リンという化学性物質がふくまれている  
 ペニシリンは伝染病や 腫んだりする傷によくきく ヒナクの病氣  
 は 枯れ草で切った傷あとからばい菌が はいつたらしいが たぶ  
 ん破傷風という恐ろしい病氣だろ う 破傷風にも ペニシリンはよ  
 くきくのた  
 ただ ふつうは注射すればよいのだが この時代は そんなものは  
 ないから口からのませるほかなかつた こうすると注射の五倍ぐら  
 いの分量がいるのだが 全然きかないということはない



○ せいれき せいぎ せいりょう なが きのこ せいりょう がつていいる。  
 「かいけい とうや ひがし うみ こえた せいりょう くに ヒミコなる女王をいたたく国がある。その国へおもむくには  
 「会・東の東海をこえたにヒミコなる女王をいたたく国がある。その国へおもむくには  
 の国 国などをへてはるかへはいらねばならぬ。その国は 国といひ、人々は がよく  
 も体も ズミをしている。ヒミコ女王はよく をつかい使ひ、百 を し、おとうに にその 治  
 をてつだわせ 手伝わせている。 年明、女王はわが 国へ使 をおくつて って、 子に  
 することをおかい、 男女どれいなどを 上した」  
 この 国という国が のことなのか、または のどこかの のことなのかよくわからな  
 いが、たぶん、はじめて を 一した国の だろうという説がつよい い。ヒミコのいた  
 地 の 良あたりだという説と だという説と、ふたつあるが、どちらにせよ、これが、  
 という国が に かれた。さいしよ のものである。〔58頁〕



西暦三世紀頃のこと……魏(そのころの中国)の書物「魏志」の中に「こういう史料がのっ  
 ている。  
 「会稽・東海を越えた所にヒミコなる女王をいたたく国がある。その国へおもむ  
 くには東海をこえてはるかへはいらねばならぬ。その国は邪馬台国  
 といひ、人々は體もイレズミをして、ヒミコ女王はよく妖術を使ひ、百余年を統  
 率し、弟にその政治を手伝わせている。景初三年(明帝)女王はわが魏國へ使者を送つて  
 天子に服従することを誓ひ、璽布、男女奴隸などを献上した」  
 この邪馬台国という国が日本のことなのか、または南方のどこかの島のことなのかよくわ  
 からないが、たぶん、はじめて日本を統一した国の名だろうという説が強い。ヒミコのい  
 た場所は近畿地方の奈良あたりだという説と北九州だという説と、ふたつあるが、どちら  
 にせよ、これが、日本という国が歴史に描かれた、最初のものである。

の ○  
 女 国 マ  
 王 国 マ

ヒミコについては 中国の 「倭人伝」の中に その頃の はたたくさんの国があり なかでも大きな国は マ 国で その国は もと男の王が治めていたが その王のあとに つかえる女ヒミコが王 についた とするされている ここでは ヒミコが の つまり 女だったことである なぜ 女なんかを女王にしたのだろうか おそらく いをやったり いをしったりして 人命を める があるというので： 人々がヒミコを れうやまっていたのだと思われる ヒミコはその 命を める があるので その国だけでなく あちこちの国をもしたがえて その いは大変なものだった

○ 「91頁〜92頁1・コマ」

○ 話によれば ニニギノミコトが 界へおりてきたとき 中で サルタヒコノミコトにであつた 出会つたという。



神話によれば 天孫ニニギノミコトが下界へおりてきたとき 途中で怪神サルタヒコノミコトに出会つたという。サルタヒコノミコトは 普通テンクの先祖といわれている。サマアサカオノミコトは 普通テンクの高祖といわれている。サマアサカオノミコトは 普通テンクの祖先といわれている。サマアサカオノミコトは 普通テンク



サルタヒコノミコトは、ふつう グの といわれている。つきが ろしく、 が いは、 オあたりに いる。グ というサ に よく ている。 から、 おおむかし わが国に つてきた 人の たしが、このサの を、 グにたくしたと、 いえないこともない。また、 サ ヒコは、もともと ンでいた などの説、ではなかつたかともいわれ ギリスの には、 したのではな 国から れついたニニギノミコトー したのではな いかとも思われる。この 語の中では、**猿田彦**は、ただの 人 には、**猿田彦**は、ただの 人 には、**猿田彦**は、ただの 人 には、**猿田彦**は、ただの 人

「142頁」

○ こだい につほんれつとう には、**馬**がいなかつた。**馬**は**大**の で、**人間**の手で へ つてきたものだ。その人間たちは**大**を、**馬**を使って**あちこち**に していた の だつたらうといわれて いる。この きばみんぞく は、 から**対** や **地**へりこんできたのだった。[\*21頁]

○ たかまがはらぞく —と、その男たちは のつた。 とは……、ニニギとは……、**何も**のなのか。の説によれば、**世**から**世**にかけて、**中国**や **あた**りを、**ニニギ**につて **けま**わつていた **が**、**ぞくぞくと** **を**つて、**たち**を、**つきつきに** して、**のち**の **マ**ト **を**、**いた**の**だ**として**いる**。

○ 話にでてくるニニギノミコトは、 から の くの やま の にく**だ**つた **子**という**こと**になつて**いる**が、**ほん**とは、**大**から **つて**きた**ただ**の の けいよう**な**もの**だ**つた**という**のである。[\*218頁]

○ この **ま**えを、**人**たちは**ど**んなに **な**しくうやまい、 の **に**き **み**つけた**こと**だ**らう**。

○ **し**かし、**は**じめ、**は**じめの**ころ**の **し**なかつた**の**だ。

○ **だ**出した **空**の **な**の**だ**。だから、**みな**な**百** **ち**かく**ま**で**生**きて**いた**など**と**、**で**たら**め**な**こと**を **い**ている。

○ **で**は、**金**の**ト** **な**どを**使**つて、**を**たい**ら**げ**て**、**マ**トに、**は**じ**め**て**の** **の** **を** **い**た**の**は**う**そ**だ**つた**の**だ**らう**か。

○ **だ**れ**か**が、**マ**ト **を**作**つ**た**こ**と**は**た**し**か**だ**。

○ **の** **う**ち**の**だ**れ**か**が**、**そ**れ**ま**で**の** **の** **を** **し**て、

マトに、<sup>くに</sup>国の<sup>みやこ</sup>を作ったのだという。  
は、こうして、<sup>しんりやく</sup>と、<sup>たたか</sup>いと、<sup>ぎやくばう</sup>の<sup>れきし</sup>のなかで、だんだん国がととのっていったのだ。  
つた。[\*254頁 255頁]

### 括弧によることばの共通表現置き換え表現

この記 は、作品中に 語を した 、これを のことばに えていくところで いら  
れている。

○ 猿田彦 「(こ)は が というんだ ト が いだろう」〔76頁6コマ〕

○ ヒミロ 「人どもよ 聞け 目はただ一つ あゝの火の にすむ火の鳥じゃ」「火の鳥をしとめたも  
のには身分の を わず つの つの と 生 人をつかわす」[\*255頁2コ  
マ]

○ 「おとうはまえにおれにいったことがあるな? どうし結ばれば やコ が生  
まれるおそれがあるって……」[\*330頁11コマ]

### ことばの注釈

○ 「げられないわ まわりから ぶすまだわ」[\*216頁2コマ]  
矢<sup>や</sup>が 射<sup>しや</sup>手が び なってすきまのない<sup>れつ</sup>のこと。

○ ニニギノミコト 「たしかにそのとおりかもしれん」「倭人どもにあわれみなどかけてはおれの<sup>だいけいかく</sup>大計画は<sup>じっげん</sup>  
ないからな」[\*250頁6コマ]  
倭人<sup>わじん</sup>…大<sup>たいりく</sup>の人間たちは の<sup>せんじ</sup>の<sup>うみんぞく</sup>のことを倭人と んでいた。

### 象徴語

○ コウ コ コウ コウ 「29頁9コマ」 の鳴き声だが、「コン 「ということばに け  
て いられている。」

### 別なキヤラクタが登場

○ 「ただの なのに」〔54頁7コマ〕「このひとつ前のコマから 場している。その人物は、 「手  
自<sup>みづかみ</sup>である。この場面だが コミック『火の鳥』黎明編」 46 2 28日 「では、「練馬温

泉<sup>いづみ</sup> 虫<sup>むし</sup>プロへ 「とき みが、リが「コーシル」と している。〔56頁7コマ〕

〔117頁6コマ〕の に ー をかぶらないめがねをかけた 「手 「が 場する。手 き文  
「 の も える。」「〔117頁4コマ〕には大 の上にヒー マークと「 の 文手  
き文字 き み」もある。

「ぼくたちやあ つ だい」[\*158頁10コマ]と「ヒヒ…まるでイの みたいに むざんす」[\*1 頁1コマ]に  
は、 夫 の「 おそ くんなど…とイヤミ」という なマンガのキ ラクターが描かれたりする。



「オーオー オーオー のんめし かし……」  
「にえ……うのら や……」  
「…… がうろ かん さたしまでといよ血 オオー」  
ちよいとでましたさんかくやろうが しかくしめんのや  
うえに ※ 「」を さまに んで のコトとして

っている。

「さても一のよ

わしのようなる

がの上で

とるとは はばかりながら

しばし御を こうむりまして

何か一読み上げます

文 いや 間 いは

にそのは おしなされ

しなされば 文にかかるが

オーサー

この編を に してみることにする。世編上・ かななる語を見ていこう。

この世編は、 という 語から き出されていく。生の進を語りの におく。

この語を見 えているのは、の大きな のグであった。にはなぜか 手が いので

ある。そう、編に する 見の王なのである。編の356頁に、

○ 見の王と がそのあとどうなったかはだれも知らない。』文 記』によれば 国

の地に の れて をよくし、百 にして となる々。王があ

ギシな生命を ちつづけ、その地の に変 していったことは大いに想 できるの

である。

とあって、これを してきたのである。「か……」「わしもずいぶんいろいろな いを見てき

たもんだ。あの や の の いもついこないだのできごとのようなだ」「あれから何

年になるかな。では 一 が をにぎっておるが……。いずれ らをす が出てくるじやろ

う」「むなしい……。……。」「いは、なにも人間だけにあるもんじやない。虫ラにさえ

あるんじや」「はむなしいものよ……」「上19頁」「った の は、かならずいずれのつ

とられるさだめじや」「わし、そののつとるほうのちからが好きなのじやよ」「上20頁」

だが、集 ではこの は に されている。ここに何らかの編 が されていることにな

る。「二一年」の文も2コマめに して始まるのが 集 である。



ミ  
ス  
ク  
ラ  
を  
い  
の  
り  
の  
ほ  
う  
さ  
く  
作  
を  
ね  
が  
お  
ど  
う  
踊  
り  
じ  
や  
。



世編に  
する人は、  
義。  
として  
えるの。

の  
て  
の  
の  
にくすぶる若き  
年とその